

## 遺跡の履歴 —大極殿跡の近代—

**宮跡顕彰の動き** 明治十年代には明治天皇の大和行幸を契機にして陵墓の整備、橿原神宮の創建、皇室と関わり  
の深い土地の名勝地指定、古代の社寺の復興、南朝史跡  
の形成等の施策が「旧慣」保存の名の下に繰り上げられ  
る。これらは皇室の権威伸張を図ったものであり、背景  
には固有の文化的伝統を誇示していく必要があったこと  
が指摘されている(高木博志『近代天皇制の文化史的研究』  
1997)。明治32年3月6日の第十三回貴族院議事には「御  
歴世宮跡保表ノ建議」が発議され、全会一致で可決され  
た。陵墓については保存や管理が行なわれていたが、宮  
跡では所在地すら判明していないものが多かったため、  
国体の完成のためには宮跡の所在地の考定と保存および  
顕彰が早急に必要とされた様子が窺える。そして、「形跡  
アル所ハ之ヲ修保シ」、ないところでは石標を建てて遺跡  
の存在を明確にしようとする。宮跡の考定、保存と顕彰  
は明治後期の国家的な課題であり、このような動きと前  
後して大極殿跡の保存顕彰がはじまる。

**平安神宮と大極殿跡** 桓武天皇を祀る神社の創建をは  
じめて唱えた岩倉具視は、皇室の権威伸張のために欧州の  
王室儀礼における旧慣保存の重要性を説く在露公使柳原  
前光の影響を受け、明治16年1月『京都皇宮保存ニ関シ  
意見書』をまとめた。その中で「禁苑内適当ノ場所ニ神  
殿ヲ作り、其大御霊ヲ奉祀シ」ようとした。岩倉死去に  
より計画は中断したが、平安遷都千百年記念祭や第四回  
内国勧業博覧会が企画され、明治25年からこの案が再浮  
上した。明治26年京都府知事千田貞暁は桓武天皇の業績  
をたたえる神宮の造営を内務大臣井上馨に願い出、「規模  
ヲ朝堂院即チ大極殿ノ体制ニ効ヒ神殿ヲ造営シ平安宮ト  
号」すことを許された。この時はじめて神社建築として  
大極殿と朝堂院という古代建築がイメージされた。さら  
に京都府勤務の建築家水口次郎が内容を具体化し、模造  
大極殿が遷都千百年記念祭のモニュメントとして建設さ  
れることになった。一方、歴史家の湯本文彦は建設候補  
地として上がっていた京都御苑案と博覧会場案の二案を  
退け、千本丸太町の大極殿跡にする意見を出した。こ  
こで歴史的事跡の顕彰の場所と遺跡が結び付いたのである。  
ところが、祈年祭協賛会が大極殿建設事業を行ない、建

設地は博覧会会場に隣接する場所が適当とされ、現京  
都市動物園の地が買収されたのだが、大極殿は南面するの  
がふさわしいとの理由で現在地に建設されることになっ  
た。その後、計画は大極殿を拜殿としその背後に本殿を  
建設するとした、祈年祭施設と神社を融合させた案に決  
定した(『平安神宮百年史』1997)。

岩倉の意図した桓武天皇の事績の顕彰は遷都千百年の  
一年後の明治28年に平安神宮創建の形をとり、遺跡の地  
ではこれを顕彰する建碑が翌年に行われた。

**その他の大極殿跡** 平城宮跡では明治30年に奈良県技師  
関野貞が水田の中に残る土壇「大黒の芝」が大極殿の遺  
跡で、この南の十ほどの土壇が朝堂院の遺跡であると気  
づき発表したことが、平城宮跡の保存顕彰の契機となっ  
た。植木商棚田嘉十郎は大極殿跡の「草ボウボウト生へ  
埋モレ牛ノ糞ヲ積ンデ」ある状態を「立派な恥サラシ我  
国体を毀ケル」と考え、明治34年に地元の溝邊文四郎と  
そこに木標を建立した。その後、平安神宮に倣った平城  
神宮の建設を目指したが、資金不足から頓挫し、遺跡の  
保存へと活動の力点を移した。

長岡宮跡では明治26年に岡本爺平が試掘により大極殿  
跡を確定した。岡本ほか郡内有志でつくる長岡宮城大極  
殿遺址創設会は「奠都記念祭並内国博覧会に内外国人京  
都に参集の日、本郡に此遺蹟有る事を表示せずばあるべ  
からず」とし、明治28年記念碑を建設した。平城でも長  
岡でも保存功労者には宮内省から下賜があり、遺跡を顕  
彰する人は国から顕彰され、地域の模範となった。

恭仁宮跡では明治33年、喜田貞吉が地表上に形跡を残  
さない内裏を顕彰するより、礎石を伴い地表上で容易に  
観察できる大極殿跡を顕彰することが遺跡の保存の目的  
にも適っているとし、顕彰の対象が漠然とした「遺跡」  
から具体的な「遺構」へ移り、遺構保存に結び付いた。

藤原宮跡は諸説があったが、高殿説をとる奈良県教育  
会がやや遅れた大正4年、大宮土壇に建碑した。

**顕彰の意味** 古代天皇制を象徴する大極殿の跡の保存顕  
彰は京都遷都千百年を機に復興を目指す京都の都市政策  
や地方改良運動という地域的な文脈、あるいはナショナ  
リズム高揚の中の政治的国際的な文脈の上で理解される。  
顕彰の対象は時代の価値観を反映しつつ、地域振興や国  
民の文化的統合の役割が期待されていたようである。百  
年前の話である。(内田和伸/平城宮跡発掘調査部)